

仙台七夕の学習への竹の利用とその効果

—宮城教育大学附属小学校第3学年「いずみタイム」での試み—

西城 潔*・三井雅視**・加藤千佳**・牧野裕可**・千葉 廣**・佐藤竜晟**

Bamboo Utilization in Comprehensive Learning about Sendai Tanabata Festival
and its Positive Effects on the Environmental Ethics of Students

Kiyoshi SAIJO, Masashi MITSUI, Chika KATO, Yuuka MAKINO,
Hiroshi CHIBA and Ryusei SATO

要旨：2020年度の宮城教育大学附属小学校第3学年の総合的学習「いずみタイム」では、コロナ禍の条件も考慮し、竹を用いた仙台七夕学習を試みた。仙台七夕についての調査とまとめに始まり、七夕飾りの制作とお披露目の会の実施、七夕飾りと竹の再利用（竹炭焼き）といった一連の活動に取り組むことで、自然物による体験学習の機会を児童に提供することができた。また調べ学習に意欲的に取り組む姿や、資源の再利用に関する意識の高まりなど、児童の資質・能力の醸成につながるような効果も認められた。

キーワード：竹、仙台七夕、再利用、総合的学習、SDGs

1. はじめに

宮城教育大学附属小学校の第3学年では、例年4-10月にかけて、「いずみタイム」(総合的な学習の時間)で「仙台七夕とわたしたち」の学習に取り組んでいる。学習は主に2つの活動から成っている。第一に仙台七夕祭りについての調査活動である。仙台市の魅力の中でも仙台七夕祭りに焦点を当て、仙台七夕がどのような祭りなのか調査を行う。第二に七夕飾りの制作と祭りへの参加という体験活動である。児童が制作した飾りは毎年8月に行われる仙台七夕祭りで商店街に飾られ、祭りを彩る。夏季休業中のため希望者のみの参加となるが、実際に商店街に出向き、飾り付けを行うことで、仙台七夕祭りに参加する。そして、これら二つの活動を踏まえ、まとめることで「仙台七夕とわたしたち」の学習は一区切りとなる。

ところが2020年は、新型コロナウイルスによる3-5月にかけての臨時休校、仙台七夕祭りの中止といった予想外の事態により、以上のような例年通りの

学習を進めることが困難となった。また臨時休校期間中、「ステイホーム」により児童は自宅で長い時間を過ごすことを余儀なくされた。このような状況下、今年度は例年と異なる視点・方法で仙台七夕の学習に取り組むこととなった(三井ほか, 2020)。

本稿では、この七夕学習において「例年と異なる視点・方法」の1つとして取り入れた、竹の利用とそれに関連した活動について報告する。具体的には、主に七夕飾りへの竹の利用、使用済みの素材や竹の再利用について紹介し、児童の反応や感想もふまえながら、その成果と課題について考察する。

2. 竹利用のねらいと活動内容

(1) 竹利用のねらい

今年度の「いずみタイム」で仙台七夕の学習に本物の竹を導入した理由の第一は、児童に仙台七夕を「自分ごと化」してほしかったためである。例年行われる仙台七夕祭りでは、飾り付け当日、児童は主催者の準

*宮城教育大学社会科教育講座、 **宮城教育大学附属小学校

備した竹に触れることが可能であるが、参加は任意であり、全員にその機会があるわけではない。しかし仙台七夕祭りの中止により校内で飾り付けを行う結果になったことは、本物の竹を活用した七夕学習を児童に体験させる上ではむしろ好都合であった。竹の利用で児童の「臨場感」が高まり、彼らが仙台七夕を「自分ごと」として捉えることにつながるなら、活動はより意義深いものになるだろう。第二の理由は、児童に自然物に触れる体験学習の機会を保障したいと考えたことである。本校は仙台の中心市街地に位置しているため、そもそも自然環境や緑に恵まれた環境にあるとは言い難い。加えて本年は「ステイホーム」のため、児童が野外で動植物と関わる場面は減少したはずである。七夕学習を通して本物の竹の色彩・質感や素材としての特性に触れることになれば、そうした「自然体験不足」の埋め合わせができるかもしれない。さらに第三の理由として、資源再利用の視点を提示する意図もあった。すなわちバイオマスという竹の特性を活かし、七夕飾りとして使い終わった後の再利用をも組み込むことで、資源の循環的利用への意識を喚起できる可能性があるだろう。この第三の理由は、「持続可能な生産消費」や「陸上生態系の持続可能な利用」をターゲットに掲げるSDGs（持続可能な開発目標）の理念にも沿うものといえる。

(2) 竹を利用した活動の概要

次に具体的な活動内容について述べる。仙台七夕についての主な学習内容は以下の3つであるが、そのうち②・③において竹を利用した。

- ① 仙台七夕についての調査とまとめの活動（お話し朝会、資料を活用しての調査、ゲストティーチャーによる講話、レポートによるまとめ）6-7月
- ② 七夕飾りの制作とお披露目の会の実施 7-8月
- ③ 七夕飾りと竹の再利用 10-12月

竹は校長（西城）が名取市の山林で伐採したものを持ち込んだ。この竹を、児童が制作した七夕飾りとともに職員室のテラスに設置した（活動②）。利用後の竹は、「無煙炭化器」による炭焼き（西城，2011；西城ほか，2014，2015）により竹炭化した（活動③）¹⁾。活動②と③は実施時期に数ヶ月の隔たりがあったが、児童に活動のつながり（継続性）を意識させられるよ

う、この間、七夕飾りや竹の再利用の方法について学級で話し合い活動を行った。また、こうした取組が児童にとっても教員にとっても初めての経験であったため、児童の意見を基に、学年の担任団（三井・加藤・牧野・千葉・佐藤）を中心に実現可能な方法を模索したり、必要な器具の調達をしたりするのに、この程度の実施時期の間隔は必要であった。

3. 仙台七夕学習と竹の利用・再利用

(1) 仙台七夕についての調査及びまとめの活動

臨時休校が終わった6月、3年生から始まる「いずみタイム」のオリエンテーションを行い、6月中旬から仙台七夕をテーマに課題を設定し、ゲストティーチャーの講話や調査活動に取り組んでいった。児童が選んだテーマは、七夕祭りの由来に関するもの、仙台七夕の歴史に関するもの、七つ飾りの意味に関するものなど様々であった。竹に関するものでは、七夕と竹の関係について調査しようとするものが多かった。

調査を進める中、6月25日（木）にお話し朝会という全校行事において、「竹のたくましさ しなやかさ」という題目で校長が全校児童向けに10分程度の話題提供をした（図1）。これは3学年向けに行ったものではないが、児童がまさに仙台七夕についての調査活動を始めた時期と重なったことから、竹への関心を呼び起こす効果があった。



図1. お話し朝会用に作成したプレゼン資料（一部）

調査とまとめの活動には、およそ1か月を要した。七夕と竹の関係について調査し、レポートにまとめたある児童は、竹の成長が早いことや殺菌作用があることに驚き、「竹を使うことにたくさんの意味があるなんて知らなかった」「今年は仙台七夕はありませんが、

竹の力でコロナウイルスをはらって、来年からまた再開できるようになったらいい」と感想をまとめていた。

(2) 七夕飾りの制作とお披露目の会の実施

調査活動と並行し、7月中旬から七夕飾りの制作を行った。新型コロナウイルス対策に留意しながら各学級1つずつ飾りの制作に取り組み、およそ3週間で完成した。なお、資材の準備については(株)文具のキクチの菊地和男氏にご協力いただいた²⁾。

8月3日(月)、3年生4学級分と、交流学习を行ってきた本学特別支援学校3学級分、合せて7つの七夕飾りを、本校2階の職員室のテラスに飾り付け、お披露目の会を行った(図2)。このお披露目の会に向けて、仙台七夕の雰囲気盛り上げるべく数日前から3年生担任が竹の切断・加工を行い、児童の制作した七夕飾りとともにテラスへ設置した。



図2. 七夕飾りを見上げる子供たち

お披露目の会では、学級ごとに行灯のデザイン画を指し示しながら、飾りに込めた願いを發表した。また校長がテラスに配置した竹について説明をした。この日は大変天気が良く、自分たちの作った飾りが青空と重なり、風に揺られる様子を見て、児童は大変満足そうであった。会の終わりに行った感想發表では、代表児童の1人が「飾りだけでもとてもきれいだけど、本物の竹があると、七夕らしくていいな」という感想を述べた。最後に、学年全員で七夕飾りを背景に記念撮影を行って会を閉じた。七夕飾りはこの日から5日間テラスに飾られることになった。この間、飾りを目にした全校児童や来校者からは、多くの感想が寄せられた。

なお、このお披露目の会の様子は河北新報社の取材を受け、翌8月4日の河北新報で報じられた(図3)。調査活動を通して、仙台七夕祭りが戦争や災害を乗り

越えて現在の形に発展してきたことを学習してきた児童の中には、自分たちの校内での取組が「飾りを見てくれた人を勇気付けられる」「来年の七夕まつりにつながる」と考える者が多くいた。新聞に取り上げられ、思わぬ形で取組を発信できたことは、そうした児童にとって大きな喜びとなった。

ツイート シェア

児童の願い短冊に込め 七夕飾り校内に展示 仙台の小学校

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い中止になった仙台七夕まつり(6~8日)の伝統をつなごうと、仙台市内の小学校では児童が飾り作りに取り組んでいる。

青葉区の宮城教育大付属小(児童706人)では3日、3年生の4クラスが作った長さ約2メートルの吹き流しを昇降口につり下げた。同大付属特別支援学校からの3本と合わせ、計7本が校舎を彩った。

同校は毎年、3年生が七夕の歴史や飾りの作り方を学んだ後、一番町四丁目商店街に飾る吹き流しを制作する。まつりは中止になったが、飾り作りは続けようと、今年は西城灘校長(58)が自宅近くの山で伐採した竹を持ち込んだ。

沢風光輝君(9)は「新型コロナに負わずに命をつなぐことを祈り、人々の笑顔をあんどんに描いた」と説明。吉田咲生さん(8)も「仲間と気持ちを込めて作ったので家族にも見てほしい」と話した。

仙台七夕まつり協賛会は子どもに七夕の雰囲気を感じてもらおうと、短冊と短冊を貼る竹飾りのポスター、ミニ飾りのキットを希望する124の小学校に届けた。

青葉区の木町通小(児童478人)の1年2組は、7月29日の授業で短冊作り挑戦した。西塚悠起君(6)が願ったのは新型コロナの収束。「コロナがなくなったら家族と新幹線に乗ってお出掛けしたい」と話した。

「えいごべらべらになりますように」と記した金野椋さん(7)は「七夕まつりがなくて寂しいけど、願いを書いたから勉強頑張ろうと思う」と意気込んだ。



思い思いの願い事を書いた短冊をポスターに貼り付けた木町通小の児童

拡大写真



宮城大付属小学校に掲げられた児童手作りの七夕飾り

拡大写真



図3. 附属小学校の七夕飾りに関する河北新報の記事
(河北新報 ONLINE NEWS より)

(3) 七夕飾りと竹の再利用

①例年とは異なる状況を活かす

例年、仙台七夕祭りに飾られた七夕飾りは、主催者によって片付けが行われる。七夕飾りは他の施設や地域へ「お嫁入り」するそうで、竹の片付けについても児童が関わることはない。しかし、今年度は仙台七夕祭りが中止となり、校内でお披露目の会を行ったため、児童の手元に自分たちで制作した七夕飾りと、飾り付けに使用した竹が残ることとなった。学年の担任団としては、この状況を活かし「作った責任」・「使った責

任」を果たすため、資源の再利用について考えさせる学習を展開していきたいと考えた。そこで10月、七夕飾りと竹の後始末の方法について、児童に投げ掛け話し合うことにした。

②話合いの様子

10月、お披露目の会以後、倉庫に仕舞い込んでいた七夕飾りを久しぶりに取り出し、児童の前に提示した。そして、「みんなが一生懸命作ったこの飾り、この後どうしようか」と問い掛けた。ある学級では、最初、児童は少し戸惑っている様子だった。おそらく、児童にとって「仙台七夕とわたしたち」の学習は、8月のお披露目の会を以て終わっていたのであろう。その後のことについて問い掛けられるとは、全く想定外だったという様子であった。

しかし、児童は少しずつ口を開き、意見を述べていった。最初は、次年度の3年生や近所の施設など、「そのまま誰かにあげる」という意見が多かった。自分たちが願いを込めて一生懸命作った飾りであること、そしてそのために、「捨てる」とは言い出しにくい雰囲気があったためであろう。しかし、そうした意見に対しては、「これは3年2組の飾り」「もう七夕は終わっている」「もらった人も困ると思う」「もうだいたいぶ破れたり、壊れたりしている」「私たちの名前も書いてあるし、個人情報のこととか心配」といった意見が出された。こうした意見をきっかけに、児童は徐々に「再利用」に向かう意見を述べ始める。「リサイクル」や「3R」などの言葉を知っている児童も多くおり、自分の知識や経験を基に、思い思いに考えを述べていった。ここから数回にわたって、七夕飾りと竹の再利用について話し合っていくことにした(図4)。

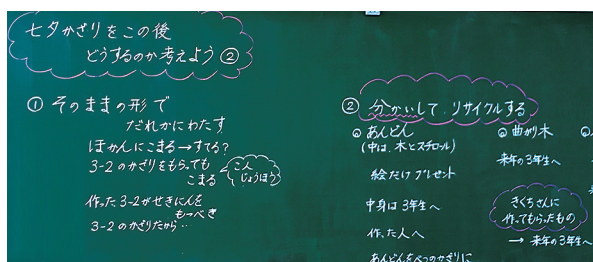


図4. 飾りの再利用についての話合い(板書の一部)

七夕飾りの再利用について具体的に考えさせる際には、まず、制作過程を想起させながら各部分がどのような材料からできていたのかを振り返らせた。そして、それらのうちの何を再利用し、何を残しておくのか考えさせた。話合いの結果、千代紙で作った吹き流し、折り紙やお花紙、不織布で作った様々な飾りについては破損のひどいものを除き全体で再利用し、一人一人の願いが書かれた短冊はそれぞれが持ち帰ることになった。また、行灯については、大変丈夫に作ってもらった枠組みを次年度の3年生のために残して、デザイン画の部分は教室の掲示にすることにした。

竹の再利用については、児童にとってイメージしづらかったためか、あまり話合いが進まなかった。そこで竹に関する絵本(内村, 2006)を提示し、竹が昔から日本人の生活の中に根付き、食や生活用品など様々な方法で活用されてきたことを紹介した。この絵本が刺激となり、児童からは竹トンボ・竹馬などのおもちゃ作りや和紙作りといった再利用の案が出された。

③七夕飾りの再利用

それぞれの学級で制作した七夕飾りを分解してみると、千代紙、折り紙、お花紙、不織布などの廃材で段ボール箱がいっぱいになった。児童の意見を基に、これらを自由に組み合わせながらA4サイズのフィルムに挟み込み、ラミネート加工することで記念の下敷きを作ることになった。

段ボール箱から取り出した様々な色や種類の紙を組み合わせたリ、自分の願いを書いた短冊を挟み込んだり、友達が作った飾りを活用したりするなど、児童は思い思いにデザインを構成していった(図5・6・7)。使う材料を選びながら「宝の山みたい」「この飾り、誰が作ったんだろう」などつぶやく児童の姿が印象的であった。また、活動後には、箱に入っている材料が次第に減っていく様子を見て、「思い出も作れて、ゴミも減らせてよかった」といった感想を述べていた。



図5. 廃材から材料を選ぶ



図6. 材料を組み合わせてデザインを考える



図7. 完成した記念の下敷き

④竹の再利用

竹の後始末について児童から様々な案が出されたが、指導者側の準備状況や実績も考慮し、上述の通り「無煙炭化器」による竹炭焼きを試みた。竹炭焼きという考えは児童から出されたものではなかったが、人気アニメ『鬼滅の刃』の影響もあってか、児童は非常に関心をもった様子だった。また竹の量が十分ではなかったため、業者より竹材を追加購入したことについては、

山を守るために適度な間伐が必要であることを補足しながら説明した。

実施日時は12月18日(金)、3・4時限目(10:10-11:45)に校庭で実施した。参加は3年生児童118名、3学年担当教諭5名、校長、保護者ボランティア19名である。児童と保護者を10のグループに分け、各グループに1台の炭化器を割り当てた。冒頭に校長から竹の割り方や燃焼方法について説明した後、グループごとに竹割りと着火に取りかかった(図8・9)。担任・校長は全体を周回し、適宜、助言や補助を行った。いずれのグループでも燃焼は順調に進み、炎が治まりかけた頃合いを見て、アルミホイルで包んださつま芋を炭化器に投入した(図10)。焼き芋は竹炭作りという目的からは外れる活動ではあるが、炭焼き時の余熱活用という意味では資源の有効利用の一環ともいえる。芋には20-25分ほどで火が通り、芋を引き上げるタイミングで炭化器内の炭をドラム缶に回収、蓋で密閉した(図11)。回収した炭は、翌週、ビニール袋に入れて児童全員が自宅に持ち帰った。



図8. 竹割り器を使って竹を割る



図9. 火の様子を見守る



図10. 炭焼きの余熱でさつま芋を焼く



図11. ドラム缶の周りで竹炭の温かさを感じる

活動後、児童のノートには竹炭を焼いてみての率直な感想が記述されていた。竹を焼くと炭になるということを初めて知ったという児童は、「楽しかったことは、炭が赤くなっていく時です。理由は、炭は黒のままだと思っていたので、すごくドキドキしたからです」と記述していた。また、竹が炭になる過程を観察しながら、「竹が燃えて灰のようになったのに、また燃えるという事」や、「竹を燃やしていると、はじっこの方からなぜか水がたくさんじわじわと出てきていた事」に疑問を抱く児童もいた。

4. 考察

本章では、2章に記したねらいと照らし合わせながら、以上の取組の意義と課題について考察を試みる。

まず竹を利用したことが、七夕学習の「自分ごと化」に寄与し得たのか否かという点である。子供たちは1年生の生活科で七夕伝説、2年生の生活科で七夕飾りなどについては学習してきているが、竹そのものを扱ったのは今回の学習が初めてだった。お披露目の会で「本物の竹があると、七夕らしくていい」という感想が出されたり、七夕と竹との関連について追究し

レポートにまとめたりした子供もいたことから、七夕学習の「自分ごと化」は、ある程度達成できたのではないかと考えている。

自然物に触れる体験学習という観点でみると、七夕飾り制作の段階では児童が直接竹に触れることはほとんどなかったため、効果は不十分であったかもしれない。しかしながら竹炭焼きにおいては、児童が実際に竹割りや竹への着火を行い、直に竹に触れる機会を設定することができた。児童からも、上記のような竹の燃える様子に対する感想や、竹に触る、竹を割るといった行為への新鮮な思いに言及する感想が寄せられた。またできた竹炭を畑にまく、消臭剤として使うなど、身近な環境改善へ竹炭を活用したり、竹炭の感想を日記にまとめる、自主学習で竹炭について調べるといった学習に展開させたりする児童もいた。したがって竹に直に触れるという意味での体験学習の機会は、児童に提供することができたのではないだろうか。今後は、七夕飾りを作る段階から竹に触れたり、竹炭を畑にまいて栽培に活かすような活動につなげたりすれば、体験学習としての活動意義はより高まるであろう。

3点目のねらいについては、「七夕飾り、この後どうしようか」との問いに当初は戸惑いをみせていた児童から次第に再利用の発想が生まれてきたこと、竹のみならず七夕飾りの紙も含めた再利用活動やゴミの減量を体験できたことなどから、予想以上の効果が得られたと考えている。ただし竹の利用については、上述の通り、児童自身から具体的アイデアが出されたわけではなかった。現代生活において竹やバイオ資源の利用は必ずしも日常的とはいえないため、これは無理からぬことであり、指導する側が適切な誘導や方向づけを行うことが重要であろう。

5. おわりに

「コロナ禍」という特殊な状況の下、指導者自身が手探りの中で上述のような実践に取り組んできた。「例年通り」が通用しない難しさもあったが、その結果、「仙台七夕とわたしたち」の学習に「資源の再利用」というこれまでとは異なる視点を導入できたことは大きな成果であった。

一連の学習を終えた1月、ある学級では新たな児童

の姿が見られるようになった。児童は学級内で様々な係を立ち上げ、学級集会の開催などの活動に取り組んでいるが、その活動の中で余分に作ってしまったメダルやカードを、希望者に配る姿である。それほど数は多くないのだが希望者が多いため、いつもジャンケンをして楽しみながら配付している。これまでは見られない姿だったため、児童に問い掛けると、「いずみ（総合的な学習）の七夕の時にやったけど、捨てるのもったいないから、みんなにあげて捨てるものを減らす。」
「少しでもリサイクルしたい。せっかく作ったのに捨てちゃうと、思い出も消えてしまう。」
などの反応があった。思わぬ形であったが、児童の中に、ある目的で使用した物を活動終了とともに捨てるのではなく、違う形で再利用しようとする意識が確かに芽生えてきたことを感じさせられた。

また教材研究に取り組む中で、竹の再利用には様々な可能性があることが分かった。今回は制約がある中で指導者側が「竹炭焼き」という選択をしたが、児童に様々な選択肢を提示し、選ばせることができれば、新たな学習活動を切り拓くことができると考える。こうした可能性を模索していくことは今度の課題としたい。

注)

¹⁾ ただし3学年児童118名全員に炭焼きを体験させるには竹の量が十分でなかったため、業者より竹材を追加購入する必要があった。

²⁾ (株)文具のキクチの菊地和男氏には、毎年「仙台七夕とわたしたち」の学習にゲストティーチャーとし

てご協力いただいている。今年度も、仙台七夕に関する児童への講話、七夕飾りの資材の準備など、多くのご指導を賜った。

謝辞

「仙台七夕とわたしたち」の学習遂行にあたり、(株)文具のキクチの菊地和男氏にはゲストティーチャーとして多くのご指導を賜った。竹炭焼き当日には、多くの保護者の方々にボランティアでお手伝いいただいた。以上の皆様に厚く御礼申し上げます。本研究には、令和2～4年度科学研究費（研究代表者：西城 潔、課題番号：20K02901）を使用した。

引用文献

- 内村悦三, 2006. そだててあそぼう69 タケの絵本. 農文協.
- 西城 潔, 2011. 伐採木を活用した炭焼きの試みー現代的課題科目「環境教育」における実践事例ー. 宮城教育大学環境教育研究紀要, 13, 39-45.
- 西城 潔・目黒李歩・鹿野愛里加・福田はる香, 2014. 津波被災校への環境教育支援ー仙台市立中野小学校の炭焼き体験ー. 宮城教育大学教育復興支援センター紀要, 2, 45-48.
- 西城 潔・目黒李歩・福田はる香・荒谷拓実・仲田克成, 2015. 小学校における出前授業の試み. 宮城教育大学環境教育研究紀要, 17, 39-44.
- 三井雅視・加藤千佳・牧野裕可・千葉 廣・佐藤竜晟: コロナ禍の状況における「仙台七夕とわたしたち」の学習(第三学年「いずみタイム」). 宮城教育大学附属小学校実践記録集「もくせい」53, 17-20.

